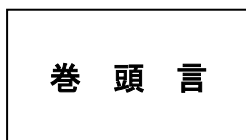




## 記事

- ♪ 巻頭言
- ♪ 体育哲学考
- ♪ 書籍紹介
- ♪ 私の研究
- ♪ 浅田学術奨励賞
- ♪ 学会大会報告
- ♪ 事務局より
- ♪ 次号予告!



## 「継続は力なり」——使わないと働かない——

近藤良享（中京大学）

誰もが承知していることですが、継続しないとなかなか力にはなりません。今年は、運悪く、日本体育学会と国際スポーツ哲学会（IAPS）の日程が同じだったので、どちらに参加しようかと思いつつ、結局、私は IAPS に参加することにしました。

9月5日の夕方にセントレアを出て、同日中に大会会場のウイスラーに到着。カナダの壮大な景色を期待していましたが、あいにく近くの山火事による煙霧のために霞んだ景色が毎日つづきました。

2年ぶりの IAPS でした。昨年は秋学期が始まる日程のために、オリンピック大会を断念。その前年は、ラグビーのメッカであるカーディフ（英国）でした。カーディフ以後の2年間、ほとんど外国人との会話がなかったので、今回は大会初日から大苦戦でした。聴けない、話せない、時差も手伝って頭がまったく働かず、□△%×&@\*#+○!?!の状態でした。肉体は会場にあるものの、発表の内容理解、参加者との会話は本当に挨拶程度と悲惨なものでした。

思い起こすこと30年余り前の1986年8月、日本で初めて国際スポーツ哲学会が開催されました。筑波大学の野性の森にある「クラブハウス」を会場に、海外からも多くが参加してくれました。私はまだ若く筑波大学専任講師2年目、32歳の駆け出しでした。

日本で初めて開催されるまでの IAPS 大会には、故阿部忍先生がお一人で参加されていたと伺っています。この IAPS の日本初開催までは国際的なネットワークは強固といえるものではありませんでした。しかし、それから30年余、毎年開催される IAPS への参加は、日本から10名ぐらい、時には20名近くになることもあります。その間、外国の先生方とのネットワークも広がり、多くの日本の先生方が在外研究員として渡航されています。私事ですが、昨年、中京大学において博士号を取得した小田先生（東海学園大学）は、日本の先生方との交流が深い、ハンス・レンク先生（カールスルーエ工科大学名誉教授）の紹介で、現在、ドイツのダルムシュタット工科大学に在外研究中です。ちなみに私も、1986年の IAPS つくば大会を縁に、ワーレン・フレイリー先生（ニューヨーク州立大学ブロックポート校）が在外研究のお世話をしてくれました。

このように30年余にわたる海外研究者とのネットワークは、日本における斯学の発展に欠かせない重要な財産となっています。ところが、残念ながら、最近は私を含めて年長組の参加が多く、後継の若手の先生、大学院生の参加が少なくなっていることが気がかりです。

ところで、最近読んだ新書（伊藤亜紗著（2016）『目が見えないアスリートの身体論 なぜ視覚なしでプレイできるのか』潮出版）と先に上梓された『目が見えない人は世界をどう見ているのか』（光文社）では、異色の身体論の世界が展開され、使わない機能は衰えること、逆に使われていない機能でも使えば磨かれることが描かれています。要するに、使わない人間の機

能は衰退・縮小していきませんが、使うことによって自身の未開の能力，機能が目覚めていきます。これは楽しいことです。

これまで国際交流に消極的，後ろ向きな会員は，未開の能力を開花させていない可能性があります。私たちの体育・スポーツ哲学研究を世界の研究者らとシェアして，よりよいスポーツ，スポーツパーソンの理解，延いては世界平和に貢献することに挑戦してはどうでしょうか？ 来年の2018年は9月5日～8日，オスロ（ノルウェー）で開催されます。一人で参加することが心配な場合もありますので，何度も IAPS に参加されている会員がアドバイスするような機会を持ちたいと思います。是非とも多くの会員が IAPS に参加して，日本と諸外国との研究交流，人間交流が継続していくことを切に願っています。



Charlene Weaving 会長を囲んで

前列左から時計回りに：  
畑，眞崎，近藤（著者）  
高橋，小田，舛本，山口

近藤良享(yo-kondo@sass.chukyo-u.ac.jp)

## 体育哲学考

### 体育哲学に期待すること

跡見順子（東京農工大学）

#### 人間社会の初めての実験「高齢科学」を担う体育学を

9月に台湾（台北）で1時間半の講演をしてきました。体育学会を代表してこのような話をするのは初めてです。自身が高齢といわれる年齢になり，様々な身体的問題をクリアして今，元気に活動を続けていられることもあり，そのノウハウと理屈もお伝えしたいとも思っただけの応募でした。また太極拳の盛んな台湾での高齢者の実態をこの目で見たいという動機もありました。軽い気持ちで引き受けたのですが，さすがに外国で日本を代表しての「政策論」ともなると勝手な意見をいうわけにもいかず，スポーツ庁に打診したり後輩に尋ねたりしてみたものの，「運動をやろう」「世界が変わる」とのかけ声だけと病気の治療のための再生医学や介護の社会的仕組みで，「高齢者の実態」や「問題」を捉えた上での政策は皆無でした。8月いっぱいをつぶして戦後の体育学や健康政策を調べることになってしまったわけですが，それが，自分が今展開しようとしている生命のシステムからの体育学，体育哲学にも結びつき，文科省に「体育局」を設置したのが実は「全機性」を提唱しておられた橋田邦彦先生であったと書かれている本への出会いにまで繋がったのですから，大きな収穫でした。

自分自身が、まともに歩けなくなるような膝や腰の痛みを経験していなければ、あるいはそれから復帰していなければ、このような課題にまじめに取り組むこともなかったであろうと思うと、致命傷にならないほどであることが大事ですが、身体の運動機能に支障を来す経験はきわめて大事なもので、それも経験と対策を長年の知識を総動員してなんとか、体育の現場に役立ち、さらには、そこから高齢者政策を提案してゆくことこそ、きわめて重要な体育学者としての使命であると感じている現在です。すべてが要素還元的な思考の元で動いている現在、様々な経験を積んだ者達が、引退せず、すべてを取り込み自分の生き様に重ねて人間が生きる指針を様々な面から提起してゆくこと——それが、体育学を創った先達への恩返しであり、これからの超高齢社会への希望ある提案です。

### 体育局をつくった先達の意志を継ぐ

ちょうど半世紀前に医学部生理学ご出身の先生方は、『人間とは何か』を研究したく、体育に移られた経緯があります。私は、お茶の水女子大学で、第二志望で体育科に入学することになりそこで慈恵医大を出られた渡邊俊男先生の深い眼差しに出会いました。自分の存在を定義できず、人間とは何かを模索していたこともあり、同じように人間を科学しようとしておられた先生の疑問はそのままそっくり私の心のだ真ん中に居座ってしまいました。それ以来、様々な経験を積むなかで機能を追求する生理学から、体育や運動が育てる核心となる自発性や創発する「いのち」の仕組みを身体を構成する物質から解こうとしてきたように思います。体を動かす、とにかくやってみることが体育学の基本になっていることは、体育のどの分野においても、理系、文系を問わず原点であることをぜひ若い人々に分かって欲しいと思います。

### 実技と理論を一人の中で実践的かつ論理的につなぐ

東京大学の駒場で25年間、実際に体育の教師として実技の授業を持っていたことが、現在の私を体育学から離れさせず、身体それ自体のかたち、うごき、スポーツのみならず武術まで、人間文化としての「身体の多様な動き」をも生命科学と同列に大事にせざるを得ない環境で生きてきたことが、今の私を創り上げています。先に挙げた橋田邦彦先生は、鳥取で東洋医学を収めた父親のもとで育ち、西欧の電気生理学の専門家となったことで、西洋と東洋の両側の思想や行動を統一する全機性を体育学に求めたものと思われます。体育学は仏教の実践に近いのではないかと感じたこともあります。ギリシャ時代から現代に至るまで私達人間の身体のかたちも遺伝子も変わっているわけではありません。多様なスポーツや文化を生み出してきたのは、それらを行うことを可能にした身体の形状や筋肉の性質や分布、唯一直立二足歩行を常態として生きる動物であるからだであり、とくに武道やゆっくり行う立ち居振る舞いの中からその動作を引き受ける意志が育ってゆくのだという確信がより強くなってきた私としては、言葉にして、我が身体の可能性を記述することが専門である体育哲学の方々に、再度原点まで降りてきて（生命科学の原理原則を理解して）、やってみて、自分に戻す、それをぜひとも期待したいです。また、身体や運動、スポーツに関係するすべての学問に目を開いておくことを薦めます。幸い、私の場合には、長男が理学療法士でかつ脳科学を専門に勉強することになり、多くの点で研究や教育の重要なポイントを育成していることになっています。

### 研究と教育の両方を一人の中でつなごう

私の場合、教育は、研究と同列になっています。教育とは脳の回路の新設であり、より良い方向への作り替えですし、さらに「活動依存性に生きる」細胞から理論を立ちあげると、教育と研究は本来表裏一体のものとして位置づける必然性があります。が、人類の科学の歴史は、ほぼ他の動物と同じように自動機械のような身体をもっているために、その身体の「生命」としての可能性やすごさをほとんど知らないままに、文化の中で構築される脳の論理に縛られた身体観をもち、社会ルールその他の人文社会学の中で規定する人間として生きているのが現実であると考えています。ことばは一端文字として残すと、それによって縛られるのもまた私達人間です。

自然科学もまた人間のみがもつ抽象化や言語化能力から派生したものです。実際、自然を反

映した脳内の認識プロセスができあがるわけですが、そのこと自体も俯瞰できる眼差しをもつこともできるほど、人間という生き物は高度な知能を持ちうる存在です。現在のところ生命科学の切り口から『人間の身体の特異性』を徹底的に科学の中に組み入れることは行われていません。体育学を専門にする研究者も教育者も、研究と教育の両方の視点をいつも自身の身体に尋ねて、やってみては言語化するべく教育体制を再構築すべきです。

現代という時代は、それまでつねに人間を知ることと切り離していなかった探求する心・探求する学を切り離してしまい、社会的人間のみを扱う人文社会学の中だけに人間を閉じ込めてしまった1世紀半があり、その狭間でせつかくの宝物の身体の中で生きるいのちの単位細胞たちの悲鳴を誰も聞いてあげていない時代になっているようです。ここに尋ねるというよりも日々ハウスキーピングをいとわずせつせつと内部をきれいにし続けている細胞たちが、より協力して活動し続けられるようにしてあげることができる体育学を共有することにしませんか。自然が生みだした生命の末裔としての人間を生きること、その意味を体育哲学の方々にこそ理解して欲しいと思います。

跡見順子 (yatomi@cc.tuat.ac.jp)

## 書籍紹介

クラウディア・パブレンカ編著、藤井政則訳 (2016)

「スポーツ倫理学の射程——ドーピングからフェアネスへ——」(晃洋書房)

竹村瑞穂 (日本福祉大学)

「スポーツ倫理学の概念は、これまで哲学の分野では取り上げられることはなく、また、同様に関連するハンドブックのなかでも見出すことができない」。当該書籍の中で、このように述べるのは、ドイツのスポーツ哲学者、クラウディア・パブレンカである。たしかに、——こと日本ではその傾向が顕著のように思われるが——、スポーツは、ながらく哲学や倫理学の考察対象からは除外されてきたと言える。岩波哲学・思想事典には、「スポーツ」や「スポーツ哲学」「スポーツ倫理学」という用語は取り上げられておらず、哲学界においてもスポーツを対象に議論をしている論文は多くない。そうした中、スポーツ哲学、スポーツ倫理学は、応用哲学や応用倫理学の一分野として確立されてきたと言えよう。

スポーツ倫理学を大別すると、スポーツと倫理 (Sports and ethics)、スポーツの倫理 (Ethics of sports) に分けられる。前者は、既存の倫理学理論を枠組みに、スポーツ内部の倫理的逸脱行為について論じるもの、後者は、まさしくスポーツとは何かという形而上学の問題とも関わりつつ、スポーツそのものの倫理体系を確立しようとする試みである。とはいえ、両者は、テーマによっては重なり合う部分も認められ、ひとたびスポーツを倫理的に探究しようとする、その複雑性に面食らうことになる。

本書(原書:Pawlenka, C. (Hrsg.). 2004. Sportethik: Regeln-Fairness-Doping)は、その複雑性に挑戦したとも言えるものである。編著者のクラウディア・パブレンカは、2002年に自身の博士論文を基にして、『功利主義とスポーツ倫理学』(Pawlenka, C. 2002. Utilitarismus und Sportethik)を出版して注目を浴びた、ドイツにおけるスポーツ倫理学の第一人者である。功利主義に軸足を置くパブレンカが、本書ではスポーツ倫理の核を捉えようとした。原書のタイトルにも示されているが、スポーツ倫理学分野において、根底から問われるべき課題である、①ルールの問題、②フェアネスの問題、そして③ドーピングの問題を取り上げて論じている。パブレンカは、この三つのテーマに対し、ドイツの議論だけではなく、北米を中心とする英語圏の議論も取り入れており、世界的なスポーツ倫理学の(この世界での)古典的見解と潮流を俯瞰することができる。その意味において、現在におけるスポーツ倫理学の学術書としては、最も優れた著作の一つといえよう。もっとも、各3項目を各論としてだけではなく、相互に関連づけなが

ら論じることを意図していたようであるが、その体系化の部分においては、まだまだ今後の引き続きの研究の洗練化が望まれるところではある。その体系化の成功は、ひいては、まさしく「スポーツの倫理学(Ethics of sports)」の確立に近づくものであり、このことは、スポーツの倫理の学としての必要性の証明にもなるものと感じるところである。

じつは、筆者がこのパブレンカの著作と出会ったのは、大学院生時代にドーピングのテーマで博士論文を執筆中のときであった。この時から当該書籍の翻訳の話が出ており、大変心待ちにしていた。2016年によく待望の翻訳書が出版されたのだが、翻訳者は阪南大学の藤井政則准教授である。藤井先生の翻訳書では、原著とは構成が変更されており、「ドーピングの問題からフェアネスへ」として、第1部が出版された。次作となる「フェアネスからルールへ」の2部作を合わせて、原書全体の翻訳版として完成する。1人での翻訳作業は大変なご苦勞があったと察するが、大変読みやすい日本語に変換されている。世界的なスポーツ倫理学の、古典から新しい議論まで網羅した論文集を、日本語で読み、学べることに對し、心より感謝しなければならない。間違いなく、藤井先生のこの大変なお仕事により、日本のスポーツ倫理学界が一步先に進んだことであろう。

竹村瑞穂(takemura@n-fukushi.ac.jp)

## 私の研究

### 芸能を通してみる日本のからだづくり

木村はるみ（山梨大学）

私たち人類に与えられた「からだ」は、「人間の形」あるいは「人体」として個人の人生におけるさまざまな活動に使われている。人間の運動には様々な動作が現れる。無意識のもの、意識的なもの、社会的なもの、生活的なもの、時代的なもの、慣習的なもの、伝統的なものなどなどであるが、こうした多くの人間運動の中に遊戯運動系がある。舞踊や芸能、スポーツなどはこの遊戯運動系に属し、自己目的性の人間行動としてとらえられることが多い。「舞踊の目的は舞踊である」というようにである。しかし、これは現代人の感覚で舞台芸術としての舞踊芸術の目的を考える場合には妥当であるが、舞踊文化の長い歴史を考えると「舞踊」という言葉に振り回されなければ、同様の身体行動は、ある時は「宗教」であり、ある時は「医療・治療」であり、ある時は「教育」である。現代における舞踊文化のさまざまな領域での発展をみれば舞踊本来の機能的な豊穡さに納得する。実は名称はどうでも良いのであるが、命名しないと困ることも多いので、ある動作を舞踊である、としているところもある。「舞踊者＝踊っている人、舞っている人」は、本当は何をしているのか。

現在の興味は、東洋における養生法と日本芸能が深層で共有している原初的な身体像・身体図式・身体思想を探ることにある。能楽発生以前の古式である「翁」に着目しながら、哲学的・動作学的に解明している。「翁」は芸能史以上に日本民俗史として重要である。世阿弥以前、鎌倉時代に多く出現したという「翁」は「翁面」とともに日本の身体思想、世界観の深層を物語る。この素朴な申楽文化を複式夢幻能という幽玄の形式美にまで高めたのが世阿弥・観阿弥親子である。

鎌田東二氏は著書である「世阿弥 身心変容技法の思想」(2017年10月 日本人体科学会第11回湯浅泰雄賞：著作賞を受賞。鎌田氏には2018年度第40回日本体育・スポーツ哲学学会山梨大会で特別講演を依頼。楽しみにしてください。)の中で「修験道的身心変容技法が能の中に受け継がれ、それがさらに現代実演芸術である「舞踏」に間歇遺伝している」と述べ「鳥飛とび」などの修験の「験較べ」を芸能的な表現に取り込んでいるといえるのではないかと指摘している。「鳥飛び」は出羽三山神社の松例祭の神事で羽黒修験者が行う跳躍である。確かに両足での高い跳躍動作は「三番叟」に類似の動作が現れる。また両足で横に飛ぶ動作で「鳥飛び」といわれる所作は、儀礼的な低い跳躍でも上賀茂神社の鳥相撲の祭儀の初めに行われる。こうした動作の名称や類似形には何かしらの関係があると予想することができる。世阿弥が滞在したこ

ともある奈良吉野の談山神社には「摩多羅神」面という貴重な翁面があり談山能（復刻）が行われているが、この神社の近くには大峰修験道と深いかかわりのある天河弁財天社もある。世阿弥も元雅もここを訪れている。確かに鎌田氏が述べるように修験者の身体と近いものを能楽師の体にあるいは演技に見ることには、動作の発生への想像を掻き立てる。山岳修行者がどのように身心を鍛えていたのか（いるのか）は現在公開されている映像資料などからしか類推できないが、かなり激しい登山行者の身体であり強靱な精神性と霊力をもつ「からだ」である。行者の身体と力を能楽に取り込んだ可能性はあるかもしれない。また当時の修行者は仏教修行や山林修行をしていたという記録もある。山や植物についての知識をもち、薬を作り医術行為も行っていたと考えられる。またヨーガや瞑想法はすでに日本に導入されていたころでもある。過酷な修行の前提には人間の身体機能をよく知る者の構築した技法があったと思われる。また談山神社には神道的な中に道教思想的な信仰も見受けられる。坐位姿勢で解脱へと向かう仏教瞑想的な精神修行とはことなり、立位で活動的な身体育成を行う導引術や気功法もここには入っていたのではないかと推測する。

現在の能楽の所作は気功・導引術ではない。現在の気功法は舞踊表現ではない。しかし健身気功の中に動物の模倣動作や流れるような優雅な所作も現れる。また世阿弥以前の翁の古式を残す奈良豆比古神社の舞（素人の舞）には農耕動作を思わせる所作のほかに舞楽「万歳楽」の類似動作や「種まき」（これは舞楽の舞名目にもある）などの言葉や所作が入るほかに、洗練さはないが気功法の一連の動作にも類似しているものもある。さらに現在の能楽師（専門家の舞）の構えには東洋思想の「気」の充実が感じられ、揺るぎない「すり足」歩行、謡の声の響き、演出における陰陽の配慮など、中国哲学の日本化がみられる。以前から継続している日本女性芸能調査も含め、どうにかまとめたいと思っている。なかなか難しいが、芸能を通して日本のからだづくりを考えたい。

木村はるみ(kimura@yamanashi.ac.jp)

## 浅田学術奨励賞

### 受賞についての雑感

松田太希（中国地域会員）

この度、論文「運動部活動における体罰の意味論」（『体育学研究』第61巻、第2号、407-420頁）で、浅田学術奨励賞を受賞しました。この論文は、運動部活動における体罰の本質的な意味を、生徒と指導者、それぞれの立場から考察したものでした。結論は、体罰は、生徒にとっても、指導者にとっても、実存的な意味があるという、それなりに悲劇的なものでした。しかし、私としては、体罰問題の闇の深さに迫っていくような体罰研究が登場してこなければ、体罰の根底にある「人間存在の暴力性」という非常にシリアスな領域に分け入っていくことなどできないと常々思っていましたから、この論文をまとめることができ、とりあえず、これまでの体罰研究に一石を投じることができただろうと感じています。実際に、この論文を読んでもくださった方から、好意的な意見を直接いただくようなこともありました。それは、筆者として、とてもうれしい経験でした。自分が書いたものを誰かが読んでくれているという事実は、実のところ、賞をいただくことよりもかけがえのないものだ、私は思っています。

しかし、うれしい気持ちがある半面、受賞の知らせが届いた時は、「賞なんか受け取っていいのだろうか」という複雑な心境が僕の胸をしめつけました。なぜなら、おそらく、今こうしている間にも、体罰によって苦しんでいる人たちは必ずいて、おそらく、何らかの助けを求めているだろうからです。そうした人々の状況を想像してみたとき、「受賞、おめでとうございます」と言われても、「いやいや、そんな」ということになってしまう。そんな感じ方は、いささか潔癖すぎるのかもしれないけど、私はいつも体罰で苦しんでいる人たちのことを考えているし、声なき声に耳を澄ませている。そうしているうちに、その人たちと「同期」してしまうことがある。そして、実際のところ、その「同期」が論文を書くエネルギーになっています。だ

から、私にとって今回の論文は、「同期」した人たちとの共著論文のようなものだと感じているし、「賞をもらったー！」というよりは、「ようやく私たちの声が届いたんだ」というほんのり切ない気持ちでいます。

村上春樹は、「文学賞は特定の作品に脚光をあてることはできるけれど、その作品に生命を吹き込むことまではできません」(『職業としての小説家』スイッチ・パブリッシング, 2015年, 69頁)と言っています。至言と言えれば至言ですが、当たり前の話と言えれば当たり前の話ですね。私の論文が賞を受けたからといって、その論文が勝手に動き出し、体罰問題を解決してくれるなんていうことはあり得ないわけです。しかし、浅田学術奨励賞受賞というかたちでスポットライトを当ててもらえたわけですから、筆者としては、この論文が、これを機に、より多くの人に読まれ、援用され、あるいは批判されることで、今後の体罰研究の発展に寄与して欲しいと願っています。

これからの研究活動ですが、体罰現象の深層に迫っていくような研究にはいったん区切りをつけるつもりでいます(いや、また書きたくなってしまうかもしれません)。そのような研究は、体罰が発生する必然性については語ることはできるのですが、「では、どうすれば解決するのか」という方向に話をもっていくづらいというところがあります(必然性について論じているので当たり前のことですが)。そこで、これからは、体罰という問題を背景に持ちながら、従来の口当たりの良い理想論ではなく、現実に根を下ろしていくことができるような力強いスポーツ指導者論やスポーツ集団・共同体論などを立ち上げていくことを目標としています。

最後に、岡山大学時代の指導教員であった関根先生と畑先生、広島大学時代の指導教員であった樋口先生に感謝を申し上げたいと思います。先生方のご指導がなければ、今回の受賞も、今の私もありませんでした。これからも、よろしくお願いいたします。

松田太希 (taikimatsuda1988@gmail.com)

## 学会大会報告

### 日本体育・スポーツ哲学会第39回大会参加報告

田井健太郎 (長崎国際大学)

平成29年8月17日より二日間に渡って、日本体育・スポーツ哲学会第39回大会が、長崎国際大学(長崎県佐世保市ハウステンボス町)にて開催されました。私は、長崎大学の高橋浩二先生とともに、同大会の実行委員を仰せつかりましたので、本稿は参加報告というより開催報告の色合いが強くなりそうです。ですが、間違いなく参加者の一人でもありますので大会内容について報告いたします。

大会プログラムは、会長特別講演、海外研究者特別講演、シンポジウム、一般研究発表11題から構成されておりました。順に報告いたします。

会長特別講演は、本年度より会長に就任された畑孝幸先生(岡山大学)により「体育・スポーツの哲学的研究40年の歩み」のタイトルでお話いただきました。体育・スポーツ原理、体育・スポーツ哲学研究の歩みとともに日本体育・スポーツ哲学会創設期以来の研究成果の蓄積についてご紹介いただき、現会員の学問上の活躍や学会の将来的な社会貢献についてご教示をいただきました。

海外招待研究者による特別講演は、台湾から来日された游添燈先生(国立台湾大学)から‘Sports Philosophy Research Trends in Taiwan’のタイトルでお話いただきました。畑先生の会長講演のお話とリンクするかのように、台湾におけるスポーツ哲学分野のこれまでの研究足跡についてご紹介いただきました。特に、グローバル化するスポーツ研究においては、‘Global East’の観点から「スポーツと東洋哲学」分野の研究を進めることが台湾スポーツ哲学の独自性に繋がるのではないかというトピックスが印象的でした。

大会2日目に開催された学会大会シンポジウムは、今年度より2年計画で始まりました。本

領域でもご活躍中の高橋 徹先生（仙台大学）、中澤雄飛先生（帝京大学）のお二方を企画担当者に、「学校体育で育てる身体を考える——学校教育の原則と体育の役割——」というテーマで議論が進められました。提案趣旨内容を抜粋しますと、「身体」に関するテーマを「学校体育」という枠組みで捉え、学校体育で育てる子どもの身体を考える試みが全体テーマとして提示されております。企画初年度である今年は、深澤浩洋先生（筑波大学：「公教育の原理的課題と身体探究」）、佐々木 究先生（山形大学：「高島平三郎に見る学校体育が育てる身体」）、森田 啓先生（千葉工業大学：「新自由主義における学校体育」）の三会員がシンポジストとして登壇されました。来年以降の議論の展開も期待されるところです。

一般研究発表では、身体論、オリンピック研究、スポーツ論など体育・スポーツの主要な研究対象を、現象学、ギリシャ哲学、現代思想など多様な方法論によって考察した研究成果が報告されました。このセッションの中から今大会で試行導入されたベストプレゼンテーション賞が、野上玲子先生（日本体育大学大学院：「オリンピックの平和構想に関する実践哲学——『平和』の定義に着目して——」）に、参加会員による投票の結果、贈呈されました。

お盆直後の日程にも関わらず、九州の最西部の街に多数の会員が参集し、活発な議論のもと学会大会が盛会に行われましたことをここに報告し、あわせて実行委員として御礼申し上げます。来年度の日本・体育スポーツ哲学会第40回大会は、山梨大学（山梨県甲府市武田）にて開催される予定です。本領域会員諸兄とも再会できますことを楽しみにしております。



シンポジウムの風景(中央左から、深澤先生、佐々木先生、森田先生)

田井健太郎(tai@niu.ac.jp)

### 事務局より

定例研究会、体育哲学年報、ホームページなどの情報を掲載しました。お問い合わせは、学会事務局担当（高岡英氣（敬愛大学）：bureau@pdpe.jp）までお願いします。

### ○定例研究会について

平成29年度第2回定例研究会を2017年12月2日（土）に下記の要領で開催いたします。なお、研究会終了後18時より懇親会を予定しております。会員の皆さま、ぜひともご参集ください。

- ・日 時：2017年12月2日（土）15：00～
- ・会 場：〒158-8508 東京都世田谷区深沢 7-1-1

日本体育大学 世田谷キャンパス 2203 教室



- ・アクセス：東急田園都市線 桜新町駅下車 徒歩 15 分程度 バス 5 分程度  
東急大井町線 等々力駅下車 徒歩 25 分程度 バス 10 分程度
- ・アクセスマップ：http://www.nittai.ac.jp/access/tokyo.html



- ・発表 1

### 「教師の境地としての無心——武道，芸道の達人の境地を考える立場から——」

照屋太郎（神奈川県会員）

無心とは、命が懸けられても、人にとって命の価値を持つ本心それ一つだけを追い、迷いの無い境地である。その境地は、鎌倉時代の禅僧の辞世の歌、幕末の二人の剣の達人が遺した文章、黒澤明監督の映画等から窺い知る事が出来る。

無心の者に触れた、無心でない妄心の者は、その心の愚かさを突き付けられる。愚かさを恥じ、命の価値を持つ本心に忠実に生きるように、成らざるを得ない。

教師が生徒に臨む時、教師が立つべき境地は、無心だろう。妄心に染まった生徒を本心に引き戻し、元から本心の生徒にはその本心を励ます無心の境地で、教師は生徒に臨む。

- ・発表 2

### 「意味生成としての『身体教育』の可能性」

久保正秋（スポーツ&レジャー研究所）

本発表では、①意味生成としての「身体教育」における「身体」、②その「身体運動」によって生起すること、③自己と他者の身体の共鳴的、相互的な関係において生成するものを論じる。身体は「開かれた身体」であり、実存の主体である。そしてその「身体運動」によって、他者の身体と共鳴、共振、相互作用（「身体図式」の同調）し、「世界へと溶け込む体験：溶解体験」が生起する。この自己と他者の身体の関係（「間身体性」）の創造、「溶解体験」の生起の志向、それが意味生成としての「身体教育」となるのである。

定例研究会での発表希望は、随時、受け付けております。発表を希望される方は、研究会担当（阿部悟郎（東海大学）：gr-abe@tsc.u-tokai.ac.jp）にご連絡願います。

## ○「体育哲学年報」への投稿について

現在、『体育哲学年報』48号(2018年3月発行予定)の原稿を募集しております。学会大会や定例研究会でご発表された方は、編集事務局担当(林 洋輔(大阪教育大学): qqfs3s79@bridge.ocn.ne.jp)まで原稿をお寄せください。締め切りは2018年1月末日です。

また、原稿作成の際には体育哲学専門領域HPの投稿規程、投稿の手引き(<http://www.pdpe.jp/toukou.html>)をご参照ください。

## ○体育哲学専門領域のHPについて

HPについてお知らせいたします。現在、下記のURLにてHPを公開しております。これに関するご意見もお寄せ下さい。

<http://pdpe.jp>

## ○体育・スポーツ科学情報コラムの発行について

日本体育学会企画による『体育・スポーツ科学情報コラム』が発行され、全ての専門領域から情報コラムが寄せられています。次のURL(<http://taiiku-gakkai.or.jp/column>)にてコラムが公開されておりますのでご覧下さい。

### 次号予告!

次号は研究情報などの内容でお届けする予定です。投稿を下されます方は、広報担当(佐々木 究(山形大学): [sasaki@e.yamagata-u.ac.jp](mailto:sasaki@e.yamagata-u.ac.jp))までお問い合わせ下さい。

.....

### 体育哲学専門領域会報第21巻第3号

発行者 日本体育学会体育哲学専門領域  
深澤浩洋(代表)  
編集者 河野清司, 佐々木 究, 畑 孝幸(広報担当)  
発行日 平成29年11月13日  
連絡先 〒263-8588  
千葉県千葉市稲毛区穴川1-5-21  
敬愛大学経済学部 高岡英氣 気付  
電話: 043-251-6363(代表)

### 【編集後記】

近年、野球やテニスの判定に代表されるように、ICT(Information and Communication Technology: 情報通信技術)の活用がスポーツでも進んでいます。審判の目がIT(Information Technology: 情報技術)の目によって代用される現状は、スポーツの危機といえるかもしれません。しかしそれは、スポーツについて考えるための好機でもあります。一部分だけを正確に測定するという点ではITにかないませんが、「身体的強さの指標」自体を決定し、そこに意味を認めるのは人間に他なりません。このようにICTの導入は、人間独自の能力とスポーツの関係を再考する機会をわれわれに与えてくれます。(K)